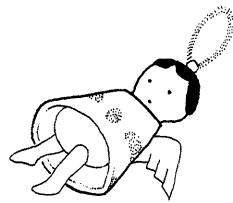


保育巡回相談事例に学ぶ

吉川はる奈



「すべての保育園、幼稚園で障害があるといわれる子どもも受け入れよう」という動きの中で、保育士生じうる保育者の悩みを互いに出し合い、次の保育に生かしていこう、学びあっていこうという目的で、T市の保育巡回相談は二十年前にスタートしました。私自身はそのうち

の最近十年間を保育巡回相談員として保育園におじゃましています。今では園長先生や担任の先生をはじめ調理の方、看護婦さん、用務の方など様々な保育園のスタッフと顔見知りになり毎回話はずきません。

子どもたちの歩みの幅広さと奥深さは想像を

はるかに超え毎回とても新鮮な気持ちになります。

とはいえ「相談」ですから保育観察後のカンファレンスでは保育者全員が出席しさまざまな悩みが打ち明けられ、ぶつけられますので緊迫した時間も味わいます。

いつも生活を共にしている保育園のスタッフから子どもそのままの姿、エピソードが次々出されていきそのすべてが説得力をもっているのでカンファレンスは出口の見えないトンネルに入り込んだような場となることが多いです。保育者とは異なる職種としての相談員の私以外に地域療育センターのケースワーカーや保育課の職員も同席します。以前に行った巡回相談に関する保育者の意識を調査したアンケート結果からは、異なる職種も含めたカンファレンスから得られた糸口が保育に直接に影響を与えているという

よりはカンファレンスを行うこと自体が事例を共有し、園の保育者全体の意識の連携、高まりにつながるということが明らかになっています。事例を通して学ぶことの大切さということでしょう。

本稿では巡回相談の事例を通して保育者の保育上の悩みについて様々な角度から考えてみたいと思います。

M子は非定型自閉症、精神遅滞で保育園の三歳児クラスに入園してきました。福祉事務所からの説明では、M子は言葉がなかなかでないとのことでは、M子は言葉の相談を継続して後、二歳半ころから週に二回地域療育センターに通所していたとのことでした。

かわいらしい色白の女の子で一人っ子。お父さんもお母さんもM子をとててもかわいがっている

るのだとケースワーカーからききました。

地域療育センターより入園前の様子を次のように説明されました。パニックをよくおこすものの子期しない事態に対してであること、センターのほかの子どもへの関心は高く他児の動きをみて行動することがときどきあること、ことばもおうむ返しから生活上必要な実用的ことばへと広がりを見せているとのことでした。

三歳児クラス春

M子が入園した三歳児クラスは男の子四人女の子九人の十三人のクラスです。先生は二人です。

はじめはM子はほかの子どもの遊具を黙ってとってしまったり、遊びを中断させてしまったりして、M子が近づくとほかの子どもが「だ

めー」と叫ぶことが多くみられました。M子もほかの子どもたちもおちつかないという感じでした。

このときのカンファレンスではM子の遊びについて様々な悩み意見が出されました。担任の先生はどこへ行っても「だめ」と叫ばれるのはM子も遊びがみつからないのではないかと心配していました。またほかの子どももびくびくしながら遊ぶのでじっくり集中できないのではないかとの声もきかれました。M子にあった遊びを提供することはできないものかということに話が集中しました。

M子が気に入っている遊びは何だろうということになりました。ただことばの問題も話題になりました。何しろおうむ返しで表現することの多いM子です。おままごと、人形遊びならど



うだろうということでもまごことコーナーを充実させてみることにしました。でもひとりで人形遊びを繰り返すことになるのではということも危惧されました。

また一方でM子のもつ「非定型自閉症」という診断名に話が集中しました。担任の先生は「目の前のM子の姿を第一に考えよう」としつつ、でも頭のどこかで診断名が気になり次に自分の保育上の動きが気になってくる」と話されました。入園した年でM子の気持ち安定するような環境作りへの試行錯誤とそれに対する不安がひしひしと伝わってきました。まずは園生活を安心してすごしてほしいと願ひ、さまざまなた試行錯誤をする上で「これでいいのだろうか、自分の接し方でM子の育ちが悪くなることはないだろうか」という不安がつきまとう、と

担任の先生は話されました。

M子の成長は本当にゆっくりですから、毎日生活を共にしている先生にとっては「変化がみえにくい」|| 「歩みを感じられない」|| 「自分に問題があるのではないか」と悩むのでしよう。またご家族は登園時のM子の大泣きに不安をもちつつも新たな園生活でのM子の成長を期待しているようで、それもおおきなプレッシャーだったのかもしれない。

M子はまごことコーナーをお気に入り場所にして園生





活を生き生きとおくるようになっていきまし
た。まずはままごとコーナーへ向かい自分の場
所を意識し一日をおくるようになっていきまし
た。

四歳児クラス夏

四歳児に進級し、クラスも男の子十人女の子
十五人の計二十五人となりました。担任の先生
は二人です。

他児のおもちゃに黙って手を出していたM子
も、クラスの子どもの名前を覚え始めました。
名前だけなのですが、不思議なもので友達の名
前を呼ばれると表情が和らぎます。たとえ名前
だけでなんだかわからずに会話がとぎれても子
どもたちの遊びは中断しません。

そのうちクラスの子どもの名前を口にし、
「○○ちゃん積み木しよう」と誘うことが出

来しました。また「せ

んせいみて！ み

て！」と自分の感動

を口にしたたり、「○

○するの（○○した

い）」ということか

ら「○○してください

い」ということばでの要求が的確になってきま

した。もちろんこれらは時折みられることす

が、遊びでは他児とごっこ遊びをすることが確

実に増えました。M子は自分の与えられた役を

一生懸命続けます。

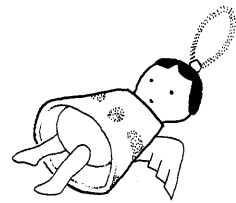
M子が発することばがテーマからずれていて

も決まった口調が使われていても子どもは気に

せずストーリーを展開させていきました。こん

なふうを受け止められていることはM子にとっ

て大きな成長の土台になったことと思います。



ご家庭も園で遊ぶM子の姿にとっても喜んでいて、という話がケースワーカーからだされました。

四歳児クラス秋

筆圧が弱く描くことはしなかったM子が自分の顔を描いてみるようになりました。ままごとコーナーの横のお絵かきコーナーで描いていました。線は思うようにならないものの目、はな、くち、髪と描いていきます。ままごと以外で遊ぶ姿がみられ、ことばも生活、遊びの中で多くみられるようになりました。

保育者全員がM子の成長を実感し、その上で「もつと言葉で表現できれば……」という声があちこちから出、「言葉を促すためにいい方法はないのか」「園でM子と個別に『向き合う』時間を作るべきではないか」ということが話題になりました。これだけ成長したのだからもつ

と、もう少し成長すれば遊びでもほかの子どもとより楽しめるのではないだろうかということ、です。M子の成長を願う保育者たちの熱い気持ちです。

一人一人の育ちにあわせた保育の大切さが保育指針の改訂で強調されて以来、障害があるといわれて入園してくる子どもによりよい方法でその子どものための『特別メニュー』を提供したいという話に発展することが最近特に多いように思います。『特別に』『個別に』という言葉ばかりが先行し、園生活から切り離された形で無理に作り上げることは何か残念に思います。

五歳児クラス夏

年長児となりクラスは男の子十一人女の子十四人で二十五人。先生は二人です。

M子は身長が伸び、髪の毛をきれいに三つ編



みに結い、なんだか年長児のりりしさを感じさせるような姿に私はとても驚きました。ごっこ遊びが大好きですが、役へのなりきり方も驚きました。ドレスを来て女の人になりきりながら買い物ごっこで遊んでいます。ただひとり劇をしているという印象でした。しかしM子は友達が歌を歌い出せば自分からそちらに入ったりもします。家庭ではこのようなM子の落ち着きにとっても喜び学習する姿勢を身につけさせようと数字を教えはじめていたようです。その教え方が話題になりました。就学を控え何でもいっ少しでもわかることを増やしてあげたいという親心によるものと思われました。ケースワーカーはご両親はとても熱心にM子にむきあっていると話されました。一方保育者からはご両親はめざす方向がずれているように感じると出されました。このようにケースワーカーが

感じているご家族の姿と保育者が感じている姿とが大きく異なり、全員が絶句してしまうこともあります。異なる職種で構成するカンファレンスならではの事態です。しかし感じ方の違いによるものだけでなくご家族が相手によってコミュニケーションの取り方を変えているという場合も多いのです。「本音をいう」相手は多くの場合たくさんではないからです。保育者間でさえ大きく異なるでしょう。

子どもたちの成長を願う熱い気持ちは共通です。共通な願いからでる様々な声が少しでも子どもたちにとつてよりよい保育へ生かされる様に……そんな思いで今日も巡回相談へ出かけていきます。

(お茶の水女子大学)